
憎まれ口

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
憎まれ口

【Nコード】
N2222S

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
京介と小真は顔を見合わせれば言い争いばかりする。ところがその二人が。ツンデレものです。

第一章

憎まれ口

秋本京介は一見すると普通の高校生だ。髪を茶色く脱色しており後ろの方を首の付け根まで伸ばしている。白く細い顔にそれぞれ左右に上になっっている一文字の黒く細い眉と奥二重の黒目がちのやや吊りあがった目をしている。瀬は一七五程あり痩せて尚且つ引き締まった身体をしている。

部活は陸上部だがそこでだ。常にある人間と衝突していた。

「全くな」

「はい、そこから先の言葉は？」

「何だっというんだよ」

こう相手に言い返すのだった。相手は茶色のふわふわとした髪を肩の高さにしている。はつきりとした大きな目に幼い顔をしている。幼いのは顔だけでなくだ。見れば背も小さくしかも胸もない。そんな少女がいた。

その彼女がだ。京介に対して言うのである。

「言ってみなさいよ」

「言えっというのかよ」

「そうよ。全くから何よ」

「御前本当にマネージャーか？」

こう相手に言う。見れば二人共学校のジャージを着ている。青いジャージである。

その姿でだ。グラウンドの端で言い合いをしているのだ。周りでは走ったり整理体操をしたりだ。陸上部の練習に余念がない。その中で二人が言い合っただった。

「何か仕事しろよな」

「ちゃんとしてるわよ」

「何処がだよ」

「あんたにはしていないだけよ」
「こう言ってつんと返す相手だった。」
「それだけよ」
「俺だけってどういうことなんだよ」
「だってあんた全然駄目じゃない」
「駄目って何がだよ」
「何もかもだよ。この前数学のテスト赤点だったでしょ」
「京介を見上げての言葉だった。背は二十センチ以上違っているからそうなってしまふのだ。」
「そうでしょ。追試受けてたでしょ」
「それがどうしたんだよ」
「そんな馬鹿に何もしいわよ」
「そういう手前はこの前現国やばかったよな」
「京介もムキになって言い返す。」
「そうだよな」
「私は理系だからいいのよ」
「じゃあ俺も文系だからいいんだよ。大体な」
「大体って何よ」
「何だ？女で数学科行きたいっていつのかよ」
「そうよ。八条大学の数学科よ」
「三ノ輪、変態だな御前」
「相手の名前をここで言つての言葉だった。」
「本当にな」
「何で私に変態なのよ。説明しなさいよ」
「女で数学科だ！？その何処が普通なんだよ」
「そういうあんただってこの前夢野久作読んでたじゃない」
「ドグラ＝マグラがどうしたんだよ」
「あんな本読んでる方がずっとおかしいわよ」
「必死の顔で京介にこう言う。」
「あれ読んでたら頭がおかしくなるっていうじゃない」

「あれのよさがわからない方がどうかしてるんだよ」

「わからないわよ。そもそも世の中は数学で動いてるのよ」

「何言ってる、国語できないでな」

こんな調子で言い合う二人だった。そんな二人を見てだ。

周囲はやれやれとした顔になってだ。こつ言うのであった。

「またあの二人か」

「秋本京介と三ノ輪小真」

「全く。毎日毎日飽きもせず」

「よく喧嘩するよな」

陸上部の者達はそんな二人を呆れながら見ていた。そのうえでの言葉である。

「っていうかあの二人幼稚園から一緒なんだろう？」

「確かな。小学校も中学校もな」

「それで今もか」

「ずっと一緒なんだな」

「クラスも一緒だったらしいわよ」

女子部員の一人が言った。

「何でもね。幼稚園の頃からね。それでね」

「その幼稚園の頃からずつとか」

「あんな感じだったんだな」

見れば二人はまだ言い合っている。本当に飽きもせずだった。

「よく続くよな」

「だよなあ。何が楽しいのやら」

「あそこまで喧嘩できるってな」

「ある意味凄いよな」

「全く」

こつ話す。そしてだった。

第二章

遂に顧問の先生が来て二人を引き離す。京介は一人ランニングに出た。

小真はふてくされた顔で一人になった。こんな有様だった。

そんな二人を見ながらだ。部員達はさらに話す。

「クラスでもあんなのだしな」

「もう休み時間暇があったら言い合ってな」

「何から何まで喧嘩で」

「困ったものよね」

「どうにかならぬのかね」

一人がこうんなことを言った。

「せめて会わないとかさ」

「無理だろ。あの二人の腐れ縁は幼稚園の頃からだしな」

「だから何をやっても巡り合う運命なんだよ」

「そんなのだから」

殆どの面々は諦めている調子であった。

「もう放っておくしかね」

「ないからな」

「やりたいようにやらせるしかね」

「もうね」

「やれやれだよ」

こんな言葉も出る。しかしどうしようもないのは確かだった。

部活だけでなくそのクラスでもだ。席はよりによって隣同士だ。

それで普段は顔を背け合っているもそれでもなのであった。

世界史の授業の時だ。小真が当てられてだ。こう言ってしまったのだ。

「ええと、ユエサル＝カニサルですか」

「ユリウス＝カエサルよ」

女の先生がすぐに訂正してきた。

「間違えないでね」

「す、すいません」

「そんなの初歩の初歩だろ」

ここで横から京介の言葉が来た。顔を彼女から背けさせながらの言葉だ。

「普通間違えるかね」

「何よ」

「間違える御前が馬鹿なんだよ」

顔を背けさせたまままた言う彼だった。

「馬鹿なんだよ」

「くっ……」

今は齒噛みするしかない小真だった。しかしだった。

その世界史の後の物理の授業ではだ。問題を当てられた京介は全く答えられなかった。小真はその彼に対して言った。やはり顔を背けさせたままだった。

「こんな問題もわからないのね」

「何!？」

「こんなの簡単なのに」

「簡単!？物理がかよ」

「あんたには難しいのね」

意地悪い言葉で言う小真だった。

「所詮はね。馬鹿だから」

「手前……」

「ふん、馬鹿」

こう言うのであった。そしてその物理の授業の後だった。

二人は授業が終わると同時にだ。最後の礼で立ったそのまま顔どころか身体も向け合ってた。まずは京介が言うのであった。

「誰が馬鹿だ、誰が」

「私の目の前にいる奴よ」

「ほお、そいつの名前言ってみる」

「秋本京介っていう馬鹿よ」

「そうか、じゃあ俺も言つてやるよ」

「何をよ」

「俺も今目の前に馬鹿がいるぜ」

小真を見据えながらの言葉だった。

「カエサルの名前を間違える馬鹿がな」

「それは誰よ」

「だから言ってるだろ。俺の目の前にいる奴だよ」

「そう。じゃあ言つわよ」

小真も負けていなかった。彼女も言い返す。

「理系赤点ばかりで短距離走れない馬鹿はね」

「そういうそつちは何だ？文系駄目で長距離になるとばててな」

「マネージャーだからいいのよ」

「いい訳ないだろ」

こんな調子だった。とにかく何処でも言い合う始末だった。

そんな二人がいるクラスも陸上部もこれには困っていた。しかしである。

第三章

ある時京介はだ。こんな話を聞いたのだった。

「三ノ輪が最近変なことになってるってな」

「何だ？変なことって」

こうだ。男子生徒達が学校の食堂で話しているのを聞いたのだ。

彼はその話を聞いた瞬間に無意識のうちにとどんをすすする手を止めた。

それで話を聞く。するとだった。

その男子生徒達はさらにこんなことを話していた。

「この前何か万引きしてたアホを通報したんだよ」

「それっていいことじゃないのか？」

「ああ、それ自体はよかつたんだよ」

そうだとこのうだった。

「けれどな。そのアホがな」

「逆恨みしてなんだな」

「それであいつ探してるらしいんだよ」

「で、探してやり返すってことか」

「そうらしいぜ。その相手が何か相当タチの悪い奴らしくてな」

京介はさらに話を聞く。うどんは今食べていない。

「もう手段を選ばないっていうかな。女の子でもな」

「平気で殴つたりか」

「ほら、いただろ」

ここで男子生徒の一方が言った。

「培読中の仙谷」

「ああ、あいつか」

「知ってるだろ。万引きにカツアゲの常習犯のな」

「それで高校一ヶ月に退学になったんだな」

「ああ、そいつが三ノ輪をつけ狙ってるって話だ」

こうした話だった。

「三ノ輪正義感は強いけれど小さいからな」

「腕っ節も全然だしな」

「だからまずいぜ。仙谷は身体でかいしな」

「それ利用して悪事働くから余計にまずいんだよな」

「だからな。あいつこれから用心しないとな」

「まずいよな」

こんな話だった。京介はその話を最後まで聞いた。

それだった。何気に小真のところに来てた。それで言うのだった。

「なあ」

「何？馬鹿が移るから近寄らないでよ」

「それはこっちの台詞だ。とにかくだ」

「ええ。とにかく？何だつてのよ」

「御前最近どうなんだよ」

何気なくというにはいささかはつきりした口調だがそれでも声をかけたのである。

「何か今にも倒れそうだな」

「全然。元気なままよ」

「顔色悪いぞ」

それでも言う京介だった。

「というか顔自体がな」

「あんたに顔のことで言われたくないわよ」

やり取りはいつもの調子だった。

「で、何なのよ。喧嘩なら高く買ってやるわよ」

「ほら、これな」

京介はここでだ。小真にあるものを差し出してきた。それは。

丸い球だった。何個かある。それを差し出したのである。

そのうえでだ。こう彼女に言った。

「やるよ」

「何、これ」

「あれだ。人にぶつけると赤い色がつくあれだ」

「ああ、最近出てきたあれね」

「やる。全部な」

顔は彼女から背けたままだがそれでも差し出したのだった。手でだ。

「ありがたく使え」

「どついう風の吹き回しよ」

小真はその彼の顔と彼が持っているその数個の球を見ながらだ。

また言うのだった。

「あんたが私にプレゼントなんて」

「いいから取れ」

京介の言葉は今度はいささか強引なものだった。

「早くな」

「後で何か寄越せとか言わないでしょうね」

「それなら最初から言うか」

また言う京介だった。ここで小真はその球を受け取ったのだった。

「いいから受け取れ。いいな」

「相手にぶつけたらそこに赤い色がつくのね」

「そうだ。防犯にもなる。それに」

「それに？」

「これもやる」

こう言っただ。今度は黄色い球を何個か出してきたのだった。

「これもだ」

「それも？今度は何よ」

「マスターだ」

それだというのだった。

第四章

「ぶついたらそこから黄色い粉が巻き散ってだ」

「それであれね。くしゃみとかさせるのね」

「これも防犯の奴だ」

「ふうん、くれるのね」

「やる」

またこう言う彼だった。

「取っておけ」

「貰って欲しいのね」

小真はいつもの口調になって彼に問うた。

「要するに。そういうことね」

「そうだ。余ったからやる」

京介もいつもの口調になっていた。そのうえでの言葉だった。

「じゃあな」

「ええ。それじゃあね」

こうして小真にその赤と黄色の球を手渡したのだった。そうしてであった。

それだけではなくだ。学校の行き帰りにこっそりとだ。小真を見張っていた。相手が何時出て来てもいいようにだ。そしてである。

何日かしてだ。帰り道にだ。

もう夜だった。外は暗がりですり灯りで照らされている場所以外は何も見えない。小真はその夜道を歩いていて京介はその彼女から少し離れて後ろを歩いている。その彼女に気付かれないようにして歩いていた。

そしてであった。神社の前を通る。その時にだった。

その神社の横からだ。不意に何か飛び出てきた。そしてだ。

小真に襲い掛かって来た。手には何かを持っている。

「えっ、何っ!?!」

「遂に出て来たか！」

小真がその神社の方を振り向いた瞬間だった。

京介はダッシュしてだ。そこに向かう。黒い影が彼女を襲おうと
していた。

小真は咄嗟に自分の制服のポケットに手を入れた。そしてである。
「喰らいなさいよ！」

あの赤い球と黄色い球を投げた。するとだった。

何か水気のあるものが当たる音がして煙が起こったようだった。
それで影の動きが止まった。

そしてそこにだった。京介が来てだ。

動きを止めて苦しむ影にだ。右足で思いきり蹴りを入れたのだっ
た。

「させるかよ！」

「ぐっ……」

横腹に思いきり決まった。これで終わりだった。

影はそのまま倒れ込む。暗がりの中にその悪相が見えた。その顔
は。

「やっぱりな。こいつかよ」

「何、こいつ」

「あれだよ。仙谷だよ」

こつ小真に言うのだった。

「御前前こいつが万引きしてるの通報したんだよな」

「ああ、スーパーのあれね」

小真もここでわかった。

「あの時のね」

「思い出したな」

「あんなの通報されて当然じゃない」

小誠はむつとした顔になってその男を見下ろしながら言い切った。

「万引きなんかして」

「それはそうだけれどな」

「何よ。それが悪いっていうの？」

「悪くはないさ」

それはいいという京介だった。しかしだった。

「ただ、な」

「ただ？」

「その後は気をつけるよ」

こつ小真に注意するのだった。

「こつという奴は後で仕返しに来るからな」

「それでだったのね」

小真はまだその手に持っている球を見て話す。

「私にこつというの渡してくれたのは」

「たまたまだよ」

「たまたまって？」

「そつだよ。余つたからやつたんだよ」

ここでは小真から顔を背けさせて話す京介だった。

「それだけだよ。勘違いするなよ」

「それで今もたまたまここにいたのね」

「ああ、そつだよ」

やはり顔は背けたままだ。

「勘違いするなよ」

「わかつたわよ。それじゃあね」

「ああ。それじゃあ？」

「私もたまたま今夜はね」

小真も京介から顔を背けさせた。そのうえで言つたのだった。

第五章

「家に誰もいないのよ」

「親父さんもお袋さんもか」

「そうよ。どっちも仕事でね」

「そついや御前のところ共働きだったな」

「それでよ。だからね」

「ああ。だから」

「お家で晩御飯位どうなのよ」

「こう京介に言うのであった。」

「たまたま作り過ぎたから」

「それでか」

「そうよ。嫌なら別にいいけれどね」

「またこんなことを言う小真だった。」

「どうなのよ」

「そうだな。俺もたまたまな」

「たまたま？」

「今予定が変わったよ」

携帯を出してだ。何時の間にかメールを送っていた。その返信を見ながらの言葉である。

「よかったな」

「変わったの」

「そうだよ、変わったよ」

「そつだというのだ。」

「親はまだ帰ってくるなって言ってるさ」

「遅くなるって連絡したんじゃないの？」

「さてな」

「まあいいわ。じゃあたまたまね」

「ああ、たまたまな」

「御馳走してあげるわよ」

こうしてだった。京介は小真の家に案内されたのだった。そしてだ。

二人で小真の部屋の中にいた。しかも横に並んでだ。彼はベッドの中で隣にいる彼女に対してこう言ったのであった。

「何かな」

「何よ」

「ここまでなるなんてな」

身体を半分起こしてそのうえでその小真に言うのだった。上半身は裸である。横にいる小真もベッドの中から見える肩は素肌である。色が白い。

「思わなかったんだがな」

「私もよ」

「そつちもか」

「御礼は御飯で終わるつもりだったわよ」

「何でこうなったんだ」

京介は考える顔になって呟いた。小真の部屋の中は暗い。しかし目が慣れてきたせいだ。その部屋の中は結構見えていた。

如何にも女の子のものというアクセサリやぬいぐるみがあちこちにある小奇麗な部屋の中を目だけで見回しながらだ。京介はまた言った。

「御前なんかとな」

「あのね、言うておくけれどね」

小真はベッドの中に寝たまま彼に言い返した。

「私なんかね」

「何だっというんだ」

「はじめてだったのよ」

ここで頬が赤くなった。暗がりの中でもよくわかるまでにだ。

「言うておくけれどね」

「俺もだよ」

だが、だった。京介もこう言うのだった。

「俺もそうだったんだよ」

「あんたもって」

「全く。はじめてがこんな奴なんてな」

「何よ、嫌なの？」

「全くな」

いささかうんざりとした顔で右手でその顔を半ば覆っての言葉だった。

「どついうことなんだか」

「それはこっちの台詞よ」

「御前のか」

「そうよ。何でなのよ」

また言う小真だった

第六章

「本当に」

「やれやれだな。しかしな」

「しかし？」

「仕方ないか」

達観した言葉だった。

「これもな」

「あのね。感謝しなさいよ」

「何で感謝するんだ」

「女の子のはじめての相手って」

京介を見ながらだ。言葉を何度かときらせながら話すのだった。

「そうそう簡単には選ばれないんだから」

「それはこつちもだよ」

「そつちもって？」

「男だつてそうなんだよ」

こつち言う京介だった。

「それだけ言っておくからな」

「そうだったの」

「まあそうだな。晩御飯は美味しかったな」

小真から顔を背けさせているのはこの時も同じだった。

「充分な」

「そうなのね」

「それに」

「それに？」

「可愛かったか」

こつちも言うのだった。

「それは認めてやってもいいな」

「別に認めてもらいたくないわよ」

「そうか」

「そうよ。まあそれでも悪い気はしないわ」

小真も寝たまま顔を彼から背けさせている。そのうえでの言葉だった。

「お料理を褒めてくれたのはね」

「そうなんだな」

「それに可愛いって言葉も」

今度はこのことについて言う彼女だった。

「認めてあげるわよ」

「それはどうもな」

「だからよ」

ベッドの中からそっと手を出してきた。白く小さな手をだ。

「ねえ」

「何だ、今度は」

「まだ帰らなくていいのよね」

こう言いながらだ。京介のその手を掴んできた。

そのうえでだ。彼に言った。

「ねえ」

「何だ、それで」

「もう一回いいから」

自分から誘った彼女だった。

「許してあげるわよ」

「もう一回か」

「じゃあ何度でもいいわよ。好きなだけね」

「好きなだけか」

「相手してあげるわ。感謝しなさいよ」

「誰が感謝するか」

「そう、嫌ならいいけれど」

またいつものやり取りになっていた。しかしだった。

京介はだ。こう彼女に言った。

「嫌でも何でもな」

「何よ」

「感謝してやるよ。それでいいんだな」

「え、ええ」

京介の今の言葉は予想していなくてだ。戸惑いを見せた小真だった。

そしてだ。戸惑ったままこう彼に言うのだった。

「ま、まあ。そうね」

「今度は何だよ」

「さつきはずっとあんたが上だったじゃない」

「それがどうしたんだよ」

「たまには私が上になってもいいじゃない」

「何でそんなこと知ってるんだよ」

京介は眉を顰めさせて小真に言い返した。

「御前がよ」

「こんなこと誰だって知ってるわよ」

「女の子でもか？」

「女の子でも男の子でも知ってるわよ」

「そうなのか」

「そうよ。女の子だって興味ある話なんだから」

そうだとだ。彼にありのまま話すのだった。

第七章

「だから。その」

「それはわかったがな」

「ええ。何？」

「御前積極的だったんだな」

京介はまだベッドの中に寝ている小真に顔を向けてだ。そのうえで言ったのだった。

「可愛い顔してな」

「か、可愛い？」

「おっと、しまった」

言ってから気付いた彼だった。

「言ってしまったか」

「はつきり言ったわよ。まああんたもね」

「俺も？」

「悔しいけれど認めてあげるわよ」

言葉は素直でないことからはじまるのだった。

「あんたもね」

「俺もか」

「結構格好いいわよ。それは認めてあげるわ」

「そうか」

「そつよ。感謝しなさい」

「御前感謝って言葉好きだな」

「することもされることも好きよ。とにかくね」

小真はここではやや強引に話した。そしてだった。また京介に言った。

「今度は私が上になるから」

「そうか。しかしな」

「しかし？今度は何よ」

「御前胸ないからな」

これは前からわかつていたことだが今日あらためて認識した事だった。小真はとにかく胸がないのだ。所謂貧乳であるのだ。

「上になつてもらつても下から揉むとかはな」

「それは言わないでよ」

急に怒つた顔になつてそれで抗議した小真だった。

「今度言つたら許さないからね」

「やれやれだな。全く」

「胸が大きいからつて何よ。そんなのはね」

「ああ、わかつたわかつた」

京介もこれ以上は言わなかつた。それでだった。あらためて小真に言うのだった。

「それじゃあ今度はな」

「ええ、私が上になるから」

こう話してだった。そのうえでまた肌を重ねる二人だった。そしてその次の日の朝。顔を見合わせた二人はだ。

いつもはいきなり喧嘩になるのにな。お互い頬を赤らめさせて。

こう言い合つたのだった。

「あ、相変わらずチビだな」

「あんたこと。無駄に大きいわね」

こう言つてだった。それで終わらせるのだった。

そしてだ。それで別れる。この事態に驚いたのは周りだった。

「何だありゃ」

「どういふ風の吹き回しなんだ？」

「いつも顔を見合わせたら喧嘩するのに」

「これつて」

皆そんな二人を見て啞然となっている。しかしだ。

何はともあれこの日から二人はこれといつて喧嘩をしなくなった。そしてだ。ここから十年後にこの二人は結婚してしまつた。その時の二人を知る面々が富士山の噴火が起こつた時よりも驚いたことは

言つまでもない。

憎まれ口 完

2010・10・26

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2222s/>

憎まれ口

2011年4月4日22時10分発行